様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５２０４２９

研究課題名（和文）「文埋め込み」に見られる言語の創造性と普遍性についての研究－語順と句構造を中心に

研究課題名（英文）On creativity and universality of language observed in "sentence embedding"

研究代表者
稲葉　治朗（INABA, Jiro）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：１０３２３４６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，原理とパラメータ理論の枠組みに基づいて，主にドイツ語を中心として，文埋め込み構造のさまざまな側面，および語順という問題について考察した。ドイツ語文構造における右辺領域（後域）には，様々なタイプの従属文（相当要素）が生起するが，それらの統語的相違点を明らかにした。語順にまつわる様々な現象については，派生の経済性という観点からの分析を行った。さらには，主に関係文などを含む名詞修飾構造を手掛かりに，語順を音韻的要因から導くことを試みた。

研究成果の概要（英文）：In this project, I dealt with some aspects of sentence embedding and problems concerning word order within the principles and parameters approach, the main focus being placed on German. I demonstrated that one needs to give different syntactic characterizations to some of the constituents that appear in the "Nachfeld" ('post-field') in German, such as sentential complements, relative clauses, etc. As for various phenomena pertaining to word order, I presented an explanation for the observed facts based on the concept of economy of derivation. Through the analyses put forward here, especially of adnominal modification structures including relative clauses, I also tried to accommodate the observed data to the newest generative methodology, whereby word order is regulated in the phonological component.

研究分野：言語学

キーワード：文埋め込み　ドイツ語　語順　文補部　関係文　後域　名詞修飾表現

１．研究開始当初の背景

人間言語の重要な特徴の一つとして「無限の創造性」があり、その一例として、話者は理論的には無限に長い文を生成することができる。このことを可能にしているのは、文の中に更に文を埋め込むことができるというメカニズムであり、これは人間言語に普遍的に観察される仕組みであるが、当然のことながらその顕われ方は言語間で一様ではない。例えば、共に「ＯＶ言語」であるとされる日本語とドイツ語においても、主文動詞とその文目的語の相対的語順は異なる（日本語：文目的語＋動詞、ドイツ語：動詞＋文目的語）。

研究代表者はこれまで、文目的語や関係文など、ドイツ語における文末動詞の右側すなわち後域（Nachfeld）と呼ばれる領域、あるいはそこの生起する要素に関心を持ってきた。ドイツ語において、目的語のうちで文相当のものだけが動詞の後方に生じるという観察的事実に対しては、従来の研究でもいくつかの提案がなされてきた。しかしそのような現象に対して、個別言語研究の枠組みを超えた、言語の普遍性と多様性（原理とパラメータのアプローチ）という観点からの研究は、十分とは言えない状況にあった。

２．研究の目的

ドイツ語は動詞が文末に生じる語順を基本とする、いわゆる動詞末尾型（ＯＶ）言語であるが、そうした文末動詞の右側（後域）に要素が生じる場合がある。特に文に相当する構成素に関しては、後域に生じることの方が自然な場合もある。例えば、名詞句目的語は義務的に動詞の左側に生じるのに対して、文が目的語の場合には、ほぼ義務的に動詞の右側に生じる。その一方で関係文は、基底位置たる被修飾名詞に隣接する位置つまり中域に生じることも、あるいは被修飾名詞とは離れて後域に生起することも可能である。このように、共に文相当の要素であっても、文目的語と関係文は、その生起位置に関して、異なる観察的事実を示す。

その一方で、とりわけ生成文法理論に基づいた研究においては、これら二種類の従属文および後域要素一般に対して、統一的な分析あるいは派生が想定されることが多かった。つまり、ＯＶ言語たるドイツ語においては、すべての要素は動詞の左側に基底生成され、派生の過程で統語的な右方移動をする、というものである。このように後域要素を統一的に扱うという分析は、確かに理論的な側面からは好ましいとも思われるが、しかしながら、これには少なからぬ経験的問題があった。本研究においてまずは、こうした点に焦点を当てて、経験的データの適切な記述および説明を目標とした。

具体的には、上述のような後域要素がどのような統語的・構造的性質を持つかということを明らかにすることを目指した。また、そこに見られる統語的特質が、音韻あるいは文処理などといった隣接領域とどのように関わり合うか、といった点を探ることも本研究の目的の一つとした。さらには、広く語順という問題が言語研究においていかなる立ち位置を占めうるかということも、今後の大きな目標として考え、当該の研究がそれに対してどのような貢献を成しうるかということに関しても考察を試みた。

３．研究の方法

(1) 研究対象とする現象についての言語データを、可能な限り幅広く、図書・雑誌論文・インターネットなどを活用して、収集・整理することに努めた。ドイツ語を中心的対象としつつも、それとは異なるパターンを示す諸言語をも考察対象とした。比較対照研究によって、個別言語の特質がより明確になるということも期待されるからである。

(2) 研究対象および関連する領域に関して、従来の研究の成果を精査し、問題点を整理した。

(3) 主に統語論を中心として、近年の理論的動向を把握し、本研究のための理論的基盤を形成することに努めた。特に語順を巡る問題に関しては、近年の生成文法理論は大きな転換点を迎えているといえる。つまり従来、統語論研究の中心的テーマの一つであった語順を、統語論の枠外のものとみなそうという主張がなされている。具体的には、一方で、従来は統語構造において適用されると考えられていたいわゆる主要部パラメータを、音韻部門における制約とみなす提案がなされている。また他方では、個別言語におけるアクセント位置などといった音韻的特質から、その言語における主要部パラメータを導き出そうという試みも見られる。これらの主張に対して、本研究がどのような立ち位置を取るべきか、理論的および経験的側面の両方から検討することを目指した。

(4) 研究会や学会などを通じて研究動向の把握に努めると同時に、自らの研究成果を発表し、専門家からのフィードバックを受けながら、議論を深めていった。また適宜、論文などの形で成果を発表していくことを目指した。

４．研究成果

(1) 従来の研究においては、ドイツ語における後域要素は統一的に扱われることが多かったが、本研究では、主に経験的なデータに基づき、要素ごとに異なる統語的特質を持ちうるということを主張した。動詞の目的語となっている後域補文については、従来の理論

的統語論研究で一般的に想定されているような外置移動では、様々な経験的問題が生じることを示した。そして、名詞句目的語とは対照的に文目的語は、後域に基底生成されると考えるべき根拠があることを論じた。なお、動詞の目的語として生じうる文（相当）要素としては不定詞補部もあるが、これについては、主文動詞の左右いずれの側にも補部として基底生成されうることを主張した。

(2) 後域に生じている関係文については、新しい分析を提案した。従来の研究においては、外置要素に対する統一的な説明への要請という観点から、関係文外置を統語的右方移動とする分析が主流であった。実際、英語の関係文外置は構造関係に基づいた意味の変化をもたらす操作であり、それゆえ音韻的移動ではありえないという経験的根拠があった。しかし本研究では、ドイツ語の関係文外置は、英語の関係文外置と表面的には似たような随意的右方移動操作であるにもかかわらず、後者とは異なって論理形式で解釈される意味に影響を与えないということを示した。そこからドイツ語における関係文の外置は、統語操作の後の音韻部門において適用される右方移動であると主張した。つまりは、ドイツ語における外置関係文は、問題となる意味解釈に関しては、その基底位置にとどまっているかのように振る舞うのである。こうした観察的事実は、外置関係文は後域において基底生成されているとする、もう一つの有力な分析に対する強力な経験的反論ともなる。つまりそのような分析によると、関係文が意味解釈されるべき「基底位置」が存在しないからである。さらに、本研究で提起した仮説により、これまでの外置研究にとって問題として残っていたタイプのデータに対しても、適切な分析が提供できることを示した。

(3) ドイツ語における関係文外置の研究を進めるにつれ、名詞句からの随意的抜き出しという現象一般に関して考察する必要性を認識するようになり、日本語などにおいて対応する現象との比較対照も行った。当該の操作に関してドイツ語と日本語は異なった振る舞いを示すが、ここでは、両言語において機能範疇の果たす役割の違いが決定的な要因となっていることを論じた。

(4) ドイツ語を始めとする言語における語順に関して、音韻的制約が決定的な影響を及ぼしているのではないかという仮説を検討し、その端緒的な研究を行った。考察対象の一つとしたのは、補文の生起位置に関してであり、そこではまず、共にＯＶ言語であるドイツ語タイプと日本語タイプの言語間に見られる相違に着目した。特に、従属文を導く補文標識（あるいはより一般的に文埋め込みのマーカー）がいかなる統語的特質を持つかという点に注目し、「循環的書き出し」という近年の生成文法において提唱されている考え方を援用して、説明を試みた。その際、いわゆる主要部前置型構造と主要部後置型構造は、単に主要部の相対的位置が異なるだけの対照的な構造なのではなく、両者の間には異なる形態統語的特質が観察されるという事実を確認した。

他方では、英語やドイツ語などにおける名詞修飾表現の生起位置の違いについても考察した。こうした現象に関して、語順に関わる制約は音韻的要因に帰することができるのではないかという可能性を追求した。これは今後も継続して考えていきたい課題でもある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

(1) TOKIZAKI, Hisao & Jiro INABA (2017) “Word order and prosody in the adnominal modification structures.” In: H. Tokizaki (ed.) *Phonological Externalization.* Vol.2. Sapporo: Sapporo University: 45-52. （査読なし）

(2) 稲葉治朗 (2016) 「ドイツ語後域の線形化について」 In: H. Tokizaki (ed.) *Phonological Externalization.* Vol.1. Sapporo: Sapporo University: 85-98. （査読なし）

(3) INABA, Jiro (2015) “Some Notes on Extraposition.” 『表現技術研究』第１０号　広島大学表現技術プロジェクト研究センター: 1-19. 2015 年 3 月（査読なし）

(4) INABA, Jiro (2014) “A Note on Adnominal Modification.” 『表現技術研究』第９号　広島大学表現技術プロジェクト研究センター: 43-57. 2014 年 3 月（査読なし）

(5) INABA, Jiro (2013) “Review Article: Hubert Haider: *The Syntax of German*.” 『言語研究』第 143 号　日本言語学会: 95-116. 2013 年 3 月（査読あり）

(6) INABA, Jiro (2012) “Some Notes on Extraction from Noun Phrases.” 『広島大学大学院文学研究科論集』第 72 巻　広島大学大学院文学研究科: 117-136. 2012 年 12 月（査読なし）

〔学会発表〕（計８件）

(1) TOKIZAKI, Hisao & INABA、 Jiro “Prosodic Constraint on Prenominal Modification.” 第 39 回ドイツ言語学会 (Deutsche Gesellschaft für Sprachwissenschaft)年次大会、ザールブリ

ュッケン（ドイツ）；2017 年 3 月 10 日

(2) 時崎久夫＆稲葉治朗　「名詞修飾の語順と音韻」、日本言語学会第 153 回大会ワークショップ「形態統語構造の音韻的外在化」、福岡大学（福岡県・福岡市）；2016 年 12 月 4 日

(3) 稲葉治朗　『ドイツ語学と生成統語論』慶應言語学コロキアム；慶應義塾大学言語文化研究所（東京都・港区）；2016 年 7 月 9 日～10 日（招待）

(4) 稲葉治朗　「ドイツ語後域の線形化における問題」、「形態統語構造の音韻的外在化：普遍性と差異」第２回ワークショップ、新潟大学（新潟県・新潟市）；2016 年 2 月 23 日

(5) 稲葉治朗　「ドイツ語統語現象における線形性」、「形態統語構造の音韻的外在化：普遍性と異差」第一回ワークショップ、札幌大学（北海道・札幌市）；2015 年 8 月 26 日

(6) INABA, Jiro “Aspects of optional movement in German and Japanese.” International Conference on Generative Linguistics and Philosophy、 Universität Frankfurt am Main、 フランクフルト（ドイツ）；2014 年 6 月 29 日

(7) INABA, Jiro „Zur Extraktion aus Nominalphrasen.” Arbeitstagung Japan-München 、Ludwig-Maximilians-Universität München、ミュンヘン（ドイツ）；2012 年 8 月 19 日

(8) 稲葉治朗　『生成統語論入門：句構造と移動を中心に』『関係文をめぐる諸問題』ドイツ言語理論研究会；東京大学駒場キャンパス（東京都・目黒区）、2012 年 8 月 4 日（招待）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
稲葉　治朗（INABA、 Jiro）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
　研究者番号：10323461

(2)研究分担者
（　　）
　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
　研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）